1640 本と暮らしのあるところ　だいかい文庫

【キーワード】
〔施設種別〕□高齢者施設　□障がい者施設　□子ども施設　□住宅　■コミュニティ拠点
〔運営主体〕□市区町村　■法人　□ NPO　□個人　　〔補助金〕□内閣府　□国土交通省　□厚生労働省　()
〔建物形式〕□１棟単体型　□複数棟集合型　□団地型　　〔建物状況〕□新築　□増築　■改修　□一部改修　□既存
〔対象者〕□高齢者　□障がい者　□子ども　□ファミリー　■多世代

写真１．外観

豊岡市の大開通り商店街沿いにある，まちのシェア型図書館・書店／カフェ／ケアの相談窓口などの機能をもつ，医療福祉を核とした小規模多機能な場。地域住民などが個性豊かな貸出本棚を展開するシェア型図書館は，本を媒介に地域との接点を多層的に持てる「ハブ」の役割を果たしている。また，医療系専門職への居場所や孤独，健康にまつわる相談の窓口としても運営され，社会的処方を体現する場である。

１．施設概要

所在地：〒 668-0033 兵庫県豊岡市中央町６－１
運営主体：一般社団法人 ケアと暮らしの編集社
設計・リノベーションデザイン・施工：合同会社 流動商店（三文字昌也氏，豊田健氏）
運営開始日：2020 年 12 月 5 日
開所時間：店番の方がいる時間（Web のカレンダーで店番が掲載されている日はオープンしている）
インタビューでお話を伺った方：
・守本陽一氏（一般社団法人 ケアと暮らしの編集社，代表理事／医師）
訪問者：土田寛，山田あすか，荻原雅史，村川真紀，池上柚月
訪問日：2022 年３月 29 日 17:00 ～ 18:00

２．運営概要

「本と暮らしのあるところ だいかい文庫」は豊岡市にある，まちのシェア型図書館・書店／カフェ／居場所や孤独，健康にまつわる相談窓口などの機能をもつ，医療福祉を核にした小規模多機能な場である。豊岡市の病院で総合診療医として勤める守本氏により 2020 年 12 月に開設され，運営されている。

図１．立地周辺（Google map* から引用）

豊岡駅前から続く大開通りの商店街を東に徒歩 10 分ほどの場所に「だいかい文庫」はある。駅からは少し離れているが，周辺にはカフェをはじめとする飲食店が多くあり，カバンストリートも近い。

＊ Google map(https://www.google.com/maps/place/%E6%9C%AC%E3%81%A8%E6%9A%AE%E3%82%89%E3%81%97%E3%81%AE%E3%81%82%E3%82%8B%E3%81%A8%E3%81%93%E3%82%8D+%E3%81%A0%E3%81%84%E3%81%8B%E3%81%84%E6%96%87%E5%BA%AB/@35.5446155,134.8160112,852m/data=!3m1!1e3!4m5!3m4!1s0x0:0xdaca9d915f8d3a31!8m2!3d35.5438594!4d134.8235657) 2022 年４月２日参照

参考文献

1）だいかい文庫HP（https://carekura.com/daikaibunko）2022年4月2日参照

2）note，医師が商店街の空き店舗に小さな図書館を作った理由。ケアをまわすエコシステム「だいかい文庫」とはなにか。（https://note.com/ymrmn/n/n36f8b0740800）2022年4月2日参照

3）西智弘，守本陽一，藤岡聡子:ケアとまちづくり、ときどきアート，中外医学社

■活動の背景

守本氏は，地域包括ケアシステム[注1)]や地域共生社会[注2)]，社会的処方[注3)]など地域を中心とした医療福祉政策が展開・推進されている医療政策の社会的背景もあり，医師として，入院から退院までのスポットで関わるケアでなく，日常の中での予防や健康，退院後の生活支援など，より生活に根差した面的なケアを地域に届けたいと考えて活動を始めた。また，地方で課題となっている空き家問題や，都市のスポンジ化[注4)]への対策として，地域への小規模多機能な場の醸成が解決策の一つになると考えており，特に医療福関係の人がその小規模多機能な場づくりを行うことでマイノリティを含む様々な人が抱える多様な課題を解決する糸口が地域内にできていくと考えて活動を展開している。

■活動フィールドとだいかい文庫に至るまで

活動の場は守本氏の出身地の隣街である豊岡市である。豊岡市は，こうのとりの野生復帰や城崎温泉が有名で，近年では演劇の街としてアーティスト・イン・レジデン

写真２．外観

全面ガラス張りのため，前を通りかがると内部の壁を埋める本棚の様子が良く見える。ダークブラウンの木目やサッシと内部の照明がおしゃれで落ち着いた雰囲気を醸し出していながら，ガラスへの手書きの掲示により親しみやすさもある。

ス[4]の設立などに力をいれている。医療・福祉の面では，ドクターヘリの出動件数全国１位や在宅見取り率が高いなどの特徴を持つ。東京都と同じ面積に人口８万人という，過疎化・高齢化が進む地域である。

守本氏の活動は 2015 年の地域診断にはじまり，2016 年から「YATAI CAFE[5]」と称し，コーヒー屋台をひいて医療などの専門職者が地域に赴き，地域の方とコーヒーを飲みながら，医療や健康について考えて対話する場づくりを行っていた。活動を続ける中で，「YATAI CAFE」を媒介とした地域の多様なコミュニティによる多層的なネットワークが生成され，地域住民がそのネットワークを利用して他者やコミュニティと繋がっていく仕組みが構築された。ほかにも映画館を利用した終活に関するイベント，花見会などを実施しており，「YATAI CAFE」は地域資源を見つける場や地域住民の居場所・交流の場といった多様な役割をもち，社会的処方の場づくりとしても機能していた。

「YATAI CAFE」を 4，5 年程続ける中で，リピーターとなる利用者も増加し，「日常の中で医療や健康について

参考文献

4）城崎国際アートセンター（KIAC）HP （http://kiac.jp/）2022 年 4 月 21 日参照

5）note，医療者が引く移動式屋台カフェの正体とは。YATAI CAFEが生み出す健康的な空間の理由。(https://note.com/ymrmn/n/n3ca817dcf1bd#IaBfe) 2022 年 4 月 2 日参照

写真３．貸出用本棚（左側正面）と販売用書籍の本棚（右側）

床から天井までフレームが組まれているが，程よく奥の壁が抜けて見えるため圧迫感は感じない。写真中央のロの字型に組まれたテーブルは合同会社流動商店によるデザインで，省スペースかつ取り回しのしやすい什器である。

の相談もできる場」への認知が地域に広まった。また，運営するメンバー内では，地域に医療者が赴く，所謂「行く」活動だけではなく，地域にあり続ける，固有の場での継続的な活動も必要と考えられていた背景もあり，だいかい文庫の設立に至った。

3．コンセプト

「本のある場」と「ケアのある場」をコンセプトとしており，「本と暮らしのあるところ」とある通り，あくまで「シェア型図書館／書店」を基本機能としている。これに併せて，悩みの共有や孤独，居場所，健康にまつわる相談ができる「居場所の相談所」も持つという展開をしている。

保健・医療の専門相談窓口にかかることに抵抗がある（相談するほどのことではないと考えているが悩みを抱えている，またはそもそも専門の相談窓口への心理的ハードルが高い）人や，自身は健康で保健や医療はあまり自分には関係がないと思っている人，暮らしの中に悩

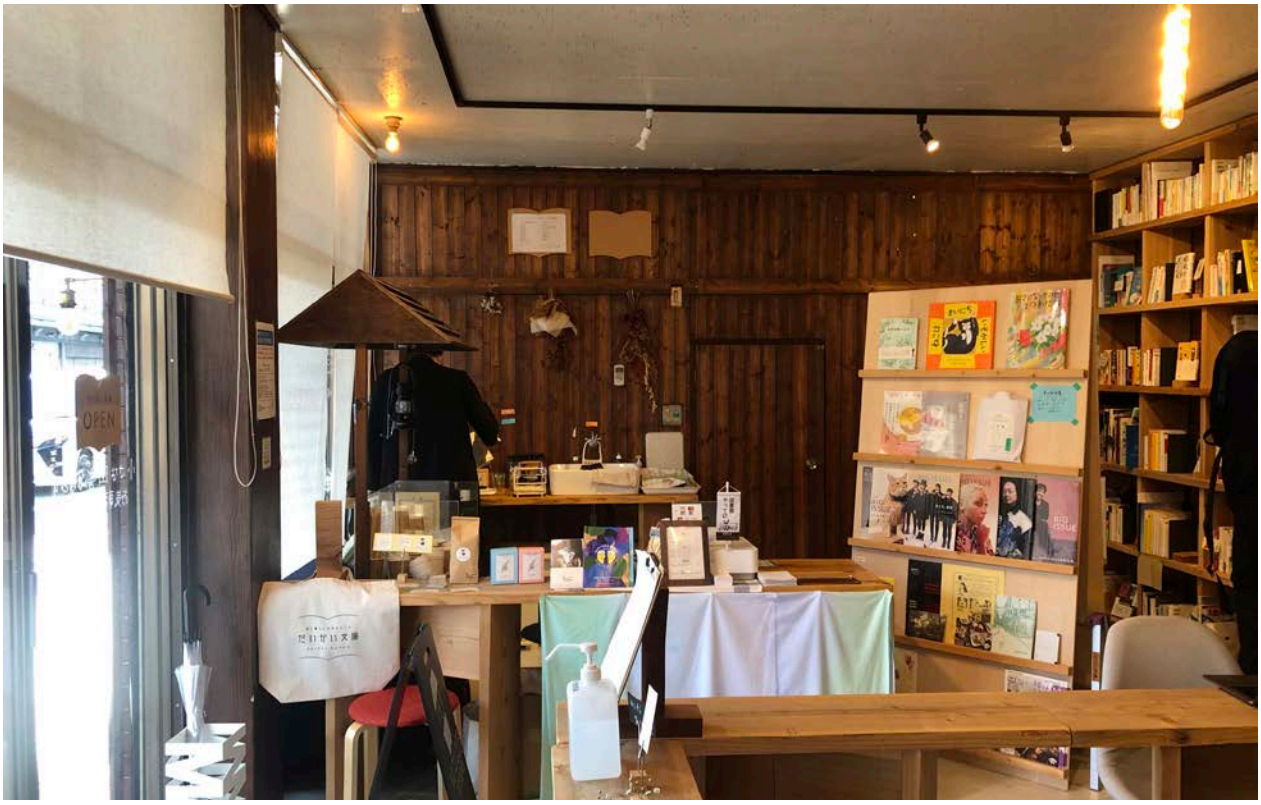

写真４．カフェ側

写真左側奥の三角屋根は「YATAI CAFE」で活躍しているコーヒー屋台。コロナウイルス禍の影響もあり休止していた時期もあったが，徐々に再開している。手前のカウンターは本の貸出や，コーヒー提供の場であり，コーヒー豆やグッズなども販売している。

みや不安を抱えている人などにこそ，日常の中に根差した気軽に相談できる場やケアの場の存在とその認知が重要とされる。しかしこれらの層に対し，名称や広報で医療や保健を前面に出したアプローチでは利用に繋がらなかったという守本氏の過去の活動での経験，また，行動経済学の「ナッジ理論」を取り込んで成功した「YATAI CAFE」での活動から，まずは「楽しそう」や「おしゃれ」といった直感に働きかけ，訪れてみたい，利用してみたいと思える機能や名称を設定している。

■機能について

機能の設定では，守本氏本人が本好きであることや，地域の書店の少なさ，特に医療福祉系，人文系，社会学系などの学術書関連の書籍を扱う書店がなかった点から，本を媒介とした場を考えていた。いくつかの事例を視察し「みんなの図書館さんかく（→事例 No.1466）」などを参考に，図書館機能を中心とする書店とした。

■名称について

名称では，医療を連想させる名称を用いず，図書館／書店を想起させる名称を掲げている。地域に居場所を提供し，健康などの相談を受ける活動には「暮らしの保健室」（→事例 No.1148）などがある。しかし，「保健室」の名が想起させる医療や保健の場といったイメージは，利用者がそこに積極的な関心を持っていなければ利用に至らないという課題がある。だいかい文庫では，コンテンツの充実により医療や保健とは別のテーマによる繋がりの醸成を意図して，中心機能である図書館／書店に沿った名称とした。

■「中距離」コミュニケーションのデザイン

名称・機能共に「コミュニティスペース」という意図は強く含めていない。コミュニティスペースという名称・機能の提示をしないことで，他者とのコミュニケーションを苦手と感じている人でも利用しやすい場としている。本を見る，借りる，買うなどの単独での利用が可能な場とすることで，「店頭でよく顔を合わせる」程度の距離感＝「中距離」なコミュニケーション構築ができるよう考慮している。一方で，後述の店番など店舗にいるスタッフは来訪者や滞在者への関わり方の心得として，常連や内輪で盛り上がるような雰囲気が固定化しすぎないよう，会話などその場のコミュニティ環から最も遠くにいる人に配慮している。

写真５．入口のサイン
木の質感とレトロなランプ照明が印象的な入口サイン。

写真６．守本氏の選書による販売用書籍
販売用書籍にはグラシン紙がかけられており，手に取って読んで，気に入ればそのまま購入できる。

写真７．個性が覗く一箱本棚たち

原則書籍のみの展示としているが，相談次第で自分の趣味の一品の展示も可能。オーナーがお店番をしている時には，自身の本棚にある書籍の販売も可能である。展示方法や見せ方もオーナーそれぞれで，並んだ書籍や一品から人柄がにじむ。大型本も置けるような，高さと奥行きにゆとりのあるフレームが自由さを生み出している。

４．運営面での特徴

先述の「暮らしの保健室」をはじめとする地域の居場所は，運営面の多くでボランティアが活動し，人的・金銭的リソースを担保している。参画のしやすさなどはメリットとして挙げられるが，場の継続的な確保といった面では課題もある。だいかい文庫では，継続的な場を確保する仕組みの一端として，「一箱本棚オーナー」システムがある。月額 2400 円で本棚の一区画を貸し出し，借主は一箱本棚オーナーとして借りたスペースに書籍の展示や貸出や店番として運用に携われる仕組みで，見学時の時点で 70 名程度が登録している。オーナーである登録者は近隣住民から理念に賛同して参画した近隣県の方など，比較的遠方まで広範囲に及ぶ。アートセンターや社会福祉協議会，市役所の職員，学校の教員，商店街の人，映画館のスタッフなど，「YATAI CAFE」での繋がりから参画している人もいる。この仕組みにより一定の収入を確保し，店番や専門職への給与，家賃などの運営資金に充てている。

守本氏は，本務では総合診療医として勤務しており，だいかい文庫での活動は本務とは完全に切り離している。一般社団法人を立ち上げて運用しているのも，医師業との切り分けを明確にして活動しやすくするためである。

■関わり方にグラデーションをもたせる

訪れた人の関わり方として，

①訪れる

②図書館を利用する／本を買う

③店番の人に話しかける／顔見知りの利用者と話す

④一箱本棚オーナーになる

⑤店番をする

といったように居場所～役割まで，関わり方の深度にグラデーションを持たせている点が特徴であり，利用者は各自，自身の状況にあわせて関わり方の深度を行き来させている。

■居場所の相談所

第 2 第 4 土曜日の 13 時～ 15 時、第 2 第 4 火曜日の 21 時半～ 22 時に居場所や孤独，健康にまつわる相談を受け付けている。4，5 回利用者として訪れた後に，相談に至るケースもある。

■携わっている専門職のスタッフ

医師（守本氏），看護師，理学療法士の３名で対応している。

■広報活動について

基本はSNSがメイン。地方であっても，SNSなどで50～60代までの幅広い層にリーチできている。また，広告ではなく，広報として新聞などの地元メディアや社協便りへの掲載，親近感がわくような手書きのお便りを地域のお店においてもらうなどの活動を行っている。SNSはFacebook/Twitter/Instagramとすべて実施しているが，Instagramで知る人が多い。

■書籍について

書籍のセレクトは守本氏が行い，基本的には自身が読みたい本を仕入れて本棚に並べている。

■利用者層について

多世代に渡る。以前調査した際は，30代女性と60代男性の利用が多かった。リタイア後の男性，子育て期や子育て終わりで社会との接点が薄い人の利用が多い。相談については，若い人の利用がほとんどで，高齢な方は相談利用のハードルが高く，複数回利用する中で相談に至るケースが多い。

また，現在は子連れの利用者が絵本を読むなどはあるが，小中学生が多く来る場ではない。こどもの利用に向けて駄菓子を置くなども考えたが，無理にごちゃまぜをつくっても，今利用している人にポジティブではないので，次に場を作る機会に取り入れようと考えている。

■インターンについて

主体的に場をつくれるような運営を心掛けており，オープン後半年ほどして，これまで一箱本棚オーナーのみであったお店番について，「インターン」としてお店番のみを行う人を募集した。毎月お店番として入ることを条件に，見学時時点で，登録者は10名ほど（うち，継続的に活動している方が３名）いる。で，だいかい文庫のような場を作りたいと希望して参加する人もいるが，社会復帰の契機として利用したい人が多い。金銭授受による生産者としての立場を強く求められないあり方ができる，生産者と消費者の間として存在できる場・役割であり，このような役割に需要があることを通して，地域との接点の場が求められていると感じている。

写真８．感想カード

返却期限を記したカードには感想記入欄が設けられ，返却時に回収後，オーナーに届けられるほか，ファイルにまとめられており，閲覧ができる。オーナーと利用者，また利用者同士を繋ぐツールのひとつである。

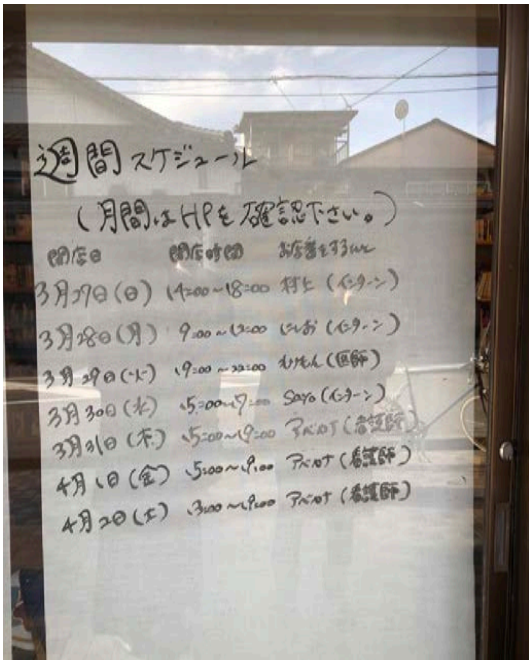

写真９．通りすがりでも見れる週間スケジュール

月間のオープン状況の情報はホームページにあるカレンダーで確認できる。週間スケジュールを通りすがりでも見れるように掲示しており，誰がいつお店番をしているかがわかる。

参考文献

6）合同会社　流動商店 HP（https://ryudoshoten.tokyo/）2022 年 4 月 21 日参照

7）合同会社　流動商店 HP，本と暮らしのあるところ　だいかい文庫　店舗デザイン・施工（https://ryudoshoten.tokyo/portfolio/%e3%81%a0%e3%81%84%e3%81%8b%e3%81%84%e6%96%87%e5%ba%ab/）2022 年 4 月 21 日参照

8）READY FOR HP，豊岡に社会的処方を実現する「シェアする図書館」を作りたい！（https://readyfor.jp/projects/47587）2022 年 4 月 21 日参照

写真 10．だいかい文庫がある近辺

写真左手前がだいかい文庫である。どの商店も間口を大きく開けたつくりであり，だいかい文庫のファサードも町並みによく調和している。写真では，訪問対応のため一時的にロールカーテンでクローズにしている。

写真 11．通り向かいのカフェ

通りを挟んで向かいにはカフェがあり，店内は程よく賑わっている。

5．建築概要

元は商店街のマッサージ店であり，リノベーションワークショップにより改修され竣工した。空間の計画原案は守本氏であり，合同会社 流動商店[6]の三文字昌也氏，豊田健氏によりリノベーションワークショップを含む全体の企画・施工などが進められた[7]。地域の人を巻き込んだリノベーションワークショップを実施しながらのプロジェクト進行をお願いできる建築士を探していたが，地域ではなかなか見つけられなかった。流動商店は守本氏が東京（谷根千地域）で活動していた際の知人であり，机や椅子などの什器は，可動性があり使いやすいものがデザインされている。

元マッサージ店であるこの物件に至るまでに，不動産からいくつか空き家の紹介を受けた。しかし，守本氏が総合診療医として働きながら進めるプロジェクトである特性上，民家などで家財が残置されている物件は改修後の空間づくりに向けた片付けなどの作業量が多いため不向きであり，元店舗である現物件は，商店街に面していることも含めて最適であった。

初期投資額はクラウドファンディング[8]により賄われている。ワークショップには，地域診断や「YATAI CAFE」活動時から関わりをもっていた住民も多く参加したほか，クラウドファンディングやメディア取材などによる広報から存在を知って参加した住民もいた。これまでの活動や各種メディアでの広報活動により，オープン時点で既に 30 名ほどの「一箱本棚オーナー」登録があったため，スムーズに運用を始められた。

6．立地・空間の特徴的な点

6．1　立地

だいかい文庫は，豊岡駅東口から円山川リバーサイドラインまで延びる大開通りにある商店街沿いに立地している。駅からは徒歩 10 分程度で，商店街の終わりに近い位置にある。駅に近く飲食店などの店舗が並ぶ賑わったエリアからはやや離れているが，大開通りと直交するカバンストリートからほど近く，近隣には豊岡劇場や落ち着いたカフェなどがあるため，程よくにぎわいのあるエリアである。商店街駅近くの最も賑わいあるエリアか

らは適度に離れていることで，利用者は目的的に来訪するため，その場にいる人が同一の目的で訪れているため，落ち着いた空間が醸成されている。

また，商店街はセミクローズドモールであり，利用者は天候を選ばずにアクセスできる。車で訪問する場合も，大開通りから入庫できるコインパーキングが点在しているため，先述の一箱本棚オーナーで遠方にいる方が店番で訪れる際などに交通手段を問わずにアクセスできる。

守本氏によると，立地選定にあたっては商店街に面していることが絶対条件であった。初めて訪れる地域の人にとっては，一見してわかりやすい活動ではないため，場所がわかりづらく隠れた所にあると「よくわからない場所でよくわからないことをやっている」と地域から不信感を招く要因になり，地域の異分子になってしまう。そのため場所は誰にとってもわかりやすい商店街に面することで，地域の人にとってこの場所の存在を受け入れやすくすると共に，訪問を受け入れる間口を広くとる意図があった。

写真 12. セミクローズドモールな商店街
見通しが良く，車道を挟むため，晴れた日には開放感がある。

６．２　空間

■本棚

店内に入ると床から天井まで全面に本棚となるフレームが展開されている。入って正面が貸出を行う「一箱本棚」であり，右手側には販売書籍の本棚がある。本棚フレームは高さや奥行き，幅にゆとりがあり，大型本も並べられるほか，二段にするなどオーナーが各自で立体的に工夫を凝らして本を展示できる自由度がある。並んだ本の背表紙の向こう側には，板張りである壁の落ち着いた色調の木目が覗くため，床から天井までが本で埋め尽くされていても圧迫感を感じさせない空間である。

また，一部では書籍に加えて趣味の展示場所としても使われており，壁面の本棚には各オーナーの個性が覗く。このように，壁面の本棚は，地域のステークホルダーである地域住民の名刺・自己紹介代わりの集積の場であり，個人の趣味や興味について，本を媒介に知ってつながることができる，物理的に見える「ハブ」の役割を果たしている。

■滞在の場所

滞在の場所には中央にあるロの字型に組まれたテーブルや椅子，窓際，本棚の間などがある。PC 作業などをす

写真 13. 本棚の様子
前後に本棚があり，テーブルのあるスペースとはまた異なる，本に没入できる雰囲気がある。

写真 14. 窓際の席
通りを眺めながら座れる。テーブルと椅子が一人分あり，時にはここで PC 作業なども行う。

写真 15. 本棚の間の座れる場所
ここと対で２か所ある。囲われ感があり心地よい。

写真 16. ケア相談についての掲示

る人は窓側のカウンター席を利用することが多い。また，本棚には一部座れるような仕掛けがされており，本棚に埋まるような，囲われ感のある中でゆっくりと滞在できる。「YATAI CAFE」で利用するコーヒー屋台が店内にあり，利用者は豆やコーヒーを購入できる。購入したコーヒーをノミながらの読書も可能。

■居場所の相談所

入口のガラス戸には，相談受付が可能な医療系専門職がお店番をする日も含めた週間のスケジュールが書かれている。また，書店・図書館の利用者向けに店内にも居場所の相談所の案内があり，相談以外の利用や通りすがりの際などにさりげなく目に入るようにしている。

居場所の相談所として設定している時間に訪問する人に対して，一人が良い場合はブラインドを下ろして適宜対応している。医療系専門職がお店番の時に相談に至る場合などは，オープンな場で気軽に話をしている。

7．今後の展開に向けて

写真 17. 貸出用本棚を臨む
本棚中央には，感想カードのファイルが置かれている。本棚全体が，オーナーである地域の人々の自己紹介展示場ともいえる。

小さな拠点[注5)]づくりや地域共生社会のモデル事業，社会的処方のモデル事業など，縦割りで省庁ごとの政策があるが，総じて小さい場を各地域に作っていくことをうたっている。しかし，降りてきた先の市区町村レベルで地域づくりや都市計画と統合できていないことが課題である。本来であれば，地域包括ケアの頃から地域づくりなどとあわせて整備できればよかったが，医療福祉の範囲に留まってしまった。近年の地域共生社会や社会的処方箋に係る政策にあわせて，地域づくり・医療福祉の政策とリンクさせて持続的な形で各地域での事業や取り組みが展開できるとよいと考えている。

また，医療福祉の場は徐々に開きつつあるが，未だサービス提供者・受益者・それ以外，やこどもや高齢者といった枠で扱われ，役割が固定化されている。そこにどうグラデーションのある場をつくっていくかが重要で，それぞれが居心地よいと感じる場があり，結果として，グラデーションやごちゃまぜが生じるものだと守本氏は考えている。利用者それぞれの居心地よい場の集合の結果としてのグラデーションある場づくりをしていきたい。

また，今後は，地域内でのネットワーク化をさらに強固にしていきたいと考えており，地域の多様なスペースや共同体とつながりをもって，そのつながりに一歩踏み入れれば公的なサービスにも民間のコミュニティにもゆるやかに繋がれる仕組み，関係性を作っていく。

（東京電機大学　村川真紀 2022.5.2）

注釈

注１）厚生労働省による「地域包括ケアシステム」は，団塊の世代が 75 歳以上となる 2025 年を目途として「高齢者の尊厳の保持と自立生活の支援の目的のもと，可能な限り住み慣れた地域で，自分らしい暮らしを人生の最期まで続けることができるような地域の包括的な支援・サービス提供体制」と定義され，施策は介護保険制度の中での高齢者を対象としている[9)]。

注２）「地域共生社会」とは内閣府による「ニッポン一億総活躍プラン（2016 年～）」などで述べられている。「障がい者，難病患者，性的マイノリティなどをはじめとするすべての人が役割をもち，互助的な関係を構築しながら自分らしく活躍できる社会」を意味している。提供サービスに主眼を置く概念である「地域包括ケアシステム」や「地域共生社会」に対し，住民を主眼においた概念ともいえるが，いずれも「地域づくり」の点では共通している[9)]。

注３）「社会的処方」は患者の非医療的ニーズに目を向け，地域の活動やコミュニティとのマッチングから，患者が自律的に生きていける支援を行い，ケアの持続性を高める仕組みである。先進諸国で課題となっている社会的孤立への解決策として 1980 年ごろからイギリスで取り組みがはじまり，注目されている[10)]。

注４）「都市のスポンジ化」とは都市の内部において，空き家や空き地など小規模な単位で未利用空間が，時間的・空間的にランダムに多数発生し，多数の小さな穴のあるスポンジのように，都市の密度が低下することを指す。都市のスポンジ化は産業の生産性低下や行政サービスの非効率化など都市の衰退を招く恐れがある[11)]。

注５）「小さな拠点」とは，小学校区など，複数の集落が散在する地域（集落生活圏）において，商店や診療所などの日常生活に不可欠な施設・機能や地域活動を行う場所を集約・確保し，周辺集落とコミュニティバス等の交通ネットワークで結ぶことで，人々が集い，交流する機会が広がっていく集落地域の再生を目指す取り組み[12)]である。

参考文献

９）公益社団法人日本生命済生会『地域福祉研究』編集委員会 監修，黒田研二 編著：地域包括支援体制のいま 保健・医療・福祉が進める地域づくり，ミネルヴァ書房，2020.12

10）西智弘 編著：社会的処方－孤立という病を地域のつながりで治す方法－，株式会社学芸出版社，2020.2

11）饗庭伸：都市をたたむ 人口減少時代をデザインする都市計画，花伝社，2015.12

12）内閣府，小さな拠点情報サイト（https://www.cao.go.jp/regional_management/index.html）2022 年 5 月 3 日参照